

私立大学研究ブランディング事業

平成30年度の進捗状況

学校法人番号	131022	学校法人名	慈恵大学		
大学名	東京慈恵会医科大学				
事業名	働く人の疲労とストレスに対するレジリエンスを強化するEvidence-based Methodsの開発				
申請タイプ	タイプA	支援期間	5年	収容定員	900人
参画組織	精神医学講座 リハビリテーション医学講座 ウイルス学講座 臨床検査医学講座 環境保健医学講座 疲労医科学研究センター 安定同位体医学応用研究センター 経営企画部 広報課 研究支援課				
事業概要	<p>本学が注力して来た体力医学や産業医学における実績に加え、私立大学戦略的研究基盤形成事業で独自に得た疲労の分子機構や客観的測定法などの知見を利用し、働く人のメンタルヘルスクエアを科学的に行う方法を開発し実用化する事業である。これにより、疲労およびストレスに起因する、うつ病などの疾患に対する予防法を確立し、患者の心の痛みを理解し患者の側に立つ全人的で高度な医療を提供するという建学の精神をブランド化する。</p>				
①事業目的	<p>本事業では、「病気を診ずして病人を診よ」という建学の精神を象徴的に示すことで、本学の最大の長所である“患者の気持ちをくみ取り行動する”という精神を、内部ステイクホルダのみならず、広く外部への浸透を図り、大学ブランド力の向上に繋げる。</p> <p>本学は、伝統的に産業医を多く輩出し地域の産業医とは密接な関係にある。東京都港区に位置する附属病院本院では、近隣の開業医と近隣企業の産業医との連携を強化し「都市型地域医療連携」の在り方をこれまで模索してきた。</p> <p>また、本学の歴史を振り返ると、学祖である高木兼寛が食事療法で脚気を予防したこと、食事・健康・住居・衣服・衛生などの観点から健康増進にアプローチを試みるなど今日の予防・未病領域の取り組みを先取りしていたこと、さらには疲労研究の重要性を強く認識していたことから、本学は歴史的に疲労や栄養に関して強い関心を持ち続けてきた。</p> <p>更に、最近、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の成果として、疲労やストレスレジリエンス低下の客観的測定を可能とした。</p> <p>本事業では、肉体的、精神的な数多くのストレスや疲労にさらされている働く人のメンタルヘルスの問題に対し、疲労やストレスレジリエンスに関する客観的測定や、疲労やストレスの解消の為の運動療法や栄養療法などを中心とした予防法や健康増進法を提供するといった、総合的なヘルスクエアシステムの構築を目指す。これにより、本学の建学の精神が医療の今日的課題にまさに応えるものであることを象徴的に示すとともに、本学の考える全人的・総合的な医療とは、病気か否かにかかわらずもっと日常的な生活の中にある身近なものであり、人々の幸福に貢献する医療なのだ、という理解を促す。</p> <p>また、その理念を実現する基盤として、産業医や企業内診療所等との密な連携を明示的に示し、本学の考える「都市型地域医療連携」の具体像を社会に広く伝えたい。</p>				
②平成30年度の実施目標及び実施計画	<p>(1)実施目標</p> <p>【研究活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・疲労・ストレス外来の開設。 ・慈恵式レジリエンス評価および強化システムのパイロットスタディーの開始。 ・動物モデルにおける新規抗疲労成分の同定。 <p>【ブランディング戦略】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ブランディング視点での事業計画と戦略的広報活動の検証・修正の継続 ・研究活動と今後の展望に関する情報発信 <p>(2)実施計画</p> <p>【研究活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共同研究契約および大学倫理委員会の審査・承認を得た上で、「東京慈恵会医科大学 産業医学の会」の会員から紹介された、疲労やストレスの自覚症状や、メンタルヘルスに問題のある企業の労働者に疲労・ストレス外来に来院してもらう。被検者にはインフォームドコンセントの上、レジリエンス評価・強化プランに参加してもらう。初期評価において、明らかな精神神経疾患や器質的疾患がある場合は、通常診療の受診を勧める。 ・レジリエンス評価・強化システムのパイロットスタディーへの参加者に対しては、精神科的診断と、疲労、ストレス、代謝に関する客観的評価を行い、多次元的な評価データの収集を行う。運動療法や栄養療法については、可能な限り被検者の意志で方法を決定することで、様々なパターンの検査データと治療法の組み合わせを試行できる様にする。 ・運動療法は運動量によって7パターンから被検者が選択する。それぞれのパターンにおける個人に適正な運動量は、心肺運動負荷試験、無酸素性作業閾値、最高酸素摂取量をもとに決定し、心拍数に基づいて個々人の運動処方を作成する。パイロットスタディーは、被検者を年間50名とし期間は2年を予定している。 ・疲労との関係に関する情報が少ない食品成分の抗疲労効果を、疲労モデルマウスと疲労バイオマーカーを用いて検討する。 <p>【ブランディング戦略】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ブランディング視点での事業計画と戦略的広報活動の検証・修正の継続:引き続き産業医、企業社員へのヒアリングを通じて得られた情報をもとに、本事業の進め方やあり方を適宜軌道修正する。 ・研究活動と今後の展望に関する情報発信: <ul style="list-style-type: none"> ①一般向け発信活動:「疲労・ストレス シンポジウム(第一回)」開催。疲労医科学センターの成果を基盤に最先端の研究動向を親しみやすく・わかりやすく伝える。大学ウェブサイトや動画サイト他各種媒体で、本シンポジウムのために整理・制作したコンテンツを2次利用する形で発信する。また、本事業に協力いただける企業に対しては本シンポジウムの内容をベースに、よりカスタマイズした形式で「出前講義」を提供。 ②専門職向け発信活動:産業医・開業医向けの研究発表会。 				

<p>③平成30年度の事業成果</p>	<p>【研究推進】 ・疲労・ストレス外来の開設。 2018年度のレジリエンス外来受診者は10名で、男性6名、女性4名であった。年齢は、60代2名、50代1名、20代7名であった。データから高尿酸血症2名で、この2名は軽度肝障害も伴っていた。糖尿病の被験者も1名含まれていた。 ・慈恵式レジリエンス評価および強化システムのパイロットスタディーの開始。 3ヶ月間のレジリエンス外来での運動療法等の介入によって、データ上大きな変化が認められた症例はなかったが、嫌気性代謝閾値における各指標の比較では酸素脈(ml/beat)ならびに仕事率(watt)の改善がみられ、特に50代と60代の3名は優位差をもって改善した。 栄養学的評価の一端として血清25ヒドロキシビタミンD(25(OH)VD)を測定したが、レジリエンス外来受診時の検査で、15ng/mL未満であった被験者が5名、15～20ng/mLが4名、20ng/mL以上が1名であった。25(OH)VDの基準範囲は未だ設定されていないが、骨粗鬆症の病態識別値としては、20ng/mL未満は“欠乏”と判定されるため、多くの被験者がVD不足であることが推測された。特に糖尿病症例は低値を示した。 疲労度、睡眠の質、抑うつに対して、運動療法が及ぼす影響を検討したところ、有意な変化を認めなかったが、睡眠の質が悪い人や抑うつのある人に対しては運動療法が好ましい効果を及ぼす可能性があり、症例を追加して検討したい。 また、運動療法を行った被験者において、唾液中ヘルペスウイルス、血液中疲労因子・疲労回復因子の測定を行い、これらの測定が疲労に対するレジリエンスの判定に使用可能であることを確認した。 ・動物モデルにおける新規抗疲労成分の同定。 疲労と疲労回復に関係する因子を解析することで、食品成分の抗疲労効果を「疲労感の減少」と「疲労による臓器機能低下の抑制」に分けて判別する方法を開発した。この方法によって、サケ、マス、カツオといった、通常は抗疲労効果があるとされない食材に、臓器機能低下抑制機能があることを発見し、新たな抗疲労食材の探索の可能性を広げることができた。</p> <p>【ブランディング戦略】 ①ブランディング戦略の効果評価を目的としたベンチマーク・スタディーのため、東京、神奈川、埼玉、千葉に在住の現役世代(職業に就いている20 - 60代男女)を対象としたアンケート調査を実施し、ホームページ上で公開を行った。本学の認知度については、大学名を「聞いたことがある」と回答した割合が、22大学(対象は東京都近郊に所在し、医学部を有する国公立大学)中7番目に多い59.6%であり、一定の認知を得ていることがわかった。 ②オープンキャンパスにて「受験生のための疲労・ストレス対策講座」の模擬講義を開催し、学祖 高木兼寛の栄養研究に関するパネル等を展示し、併せて教員が説明員として立ち会い、研究活動と今後の展望に関する情報発信を行なった。 ③疲労、ストレスに関する基礎知識、研究成果、一次予防情報などをマンガ形式にてホームページ上で公開し、研究活動と今後の展望に関する情報発信を行なった。現在、13話まで公開中であり、閲覧者からの質問も寄せられ、好評を得ている。質問への回答も含め、今後も継続的に発信する予定である。 ④2018年11月に研究ブランディング事業の特設ホームページのリニューアルを図り、東京慈恵会医科大学のトップページからの閲覧はもとより、附属病院のホームページにバナーを貼ることで、学生、その保護者のみならず、広く一般の方に対し本事業の取組みと成果の情報発信をすることを可能にした。 ⑤2019年3月に、当該事業の研究内容や研究者の人となりを紹介するため、インタビューを医学科の学生、インタビューを当該事業にかかわる研究者とする対話形式の記事をホームページ上で公開をした。 http://www.jikei.ac.jp/branding/2017/evidence-based-methods.html</p>
<p>④平成30年度の自己点検・評価及び外部評価の結果</p>	<p>◆研究評価委員会(書面評価) 疲労・ストレス外来の開設については、本研究実施のために、初めて専門外来(仮称「レジリエンス強化外来」)を開設したことは大いに評価できる。加えて会計などの事務面での受入れのみならず、安全面にも配慮した研究体制を短期間で構築し、未病、予防領域における新たな医療の提供の機会を可能にした点は慈恵大の持つチーム力の表れとして大いに評価できる。またこの成果は本研究課題の趣旨にも非常に適合しているといえる。 一方、30年度はパイロットスタディーとして10名の被験者に関するデータ解析にとどまった。今後は症例数を増やし疲労とうつとの関係だけではなく、睡眠や運動との関係も追求し新たな医療の確立を目指してほしい。 また、食品成分の抗疲労効果を判定する新しい評価軸を開発することにより、新規抗疲労食材の探索が可能になるものと期待できる。</p> <p><研究評価委員会メンバー> 「委員長」 柳澤裕之(東京慈恵会医科大学 環境保健医学講座 教授) 「委員」 丸毛啓史(東京慈恵会医科大学 附属病院 院長) 「外部委員」 渡辺恭良(国立研究開発法人 理化学研究所 ライフサイエンス技術基盤研究センター センター長) 田島文博(和歌山県立医科大学 リハビリテーション医学講座 教授) 倉恒弘彦(関西福祉科学大学 健康福祉学部 健康科学科 学部長・教授) 新井平伊(順天堂大学 医学部 精神医学教室 教授)</p> <p>◆研究ブランディング評価委員会(書面評価) 研究ブランディング評価委員会において、2018年度のブランド発信強化について点検と評価を行った。 情報発信の面では、当初予定していたトップアスリートを招聘してのシンポジウムの開催はできなかったが、ホームページのリニューアルを行い、マンガによる情報発信や教員と学生のインタビュー記事による研究者と研究内容の紹介といったユニークな取り組み、オープンキャンパスの際の模擬講義等により広報の充実を図り、一般の方や受験生、保護者などに向けて本事業の取組みと成果を広く発信し年度当初の目標は達成できたと考えられる。</p> <p><研究ブランディング評価委員会メンバー> 「委員長」 浅野 晃司(理事) 「委員」 岡野ジェイムス洋尚(総合医科学研究センター 再生医学研究部 教授) 常喜達裕(内科学講座 総合心療内科 准教授) 「外部委員」 水越康介(首都大学東京 経済経営学部 准教授) 橋本雄幸(汐留みらいクリニック 院長)</p> <p>(事業評価委員会による自己評価) 2018年度「私立大学研究ブランディング事業」の自己評価を行った結果、当年度は本研究実施のために初めて専門外来(仮称「レジリエンス強化外来」)を開設するなど大きな成果を挙げることができた。よって「研究推進」並びに「ブランディング戦略」事業についてその成果を高く評価できるとともに、目標についてもおおむね達成できたと考える。</p>
<p>⑤平成30年度の補助金の使用状況</p>	<p>監査法人による定期的な検査を受け、適切に管理している。</p>